

---

# ヨッカカンノ恋

国沢裕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヨツカカンノ恋

### 【Zコード】

Z5311C

### 【作者名】

国沢裕

### 【あらすじ】

あたしこと、チカは、ある日、変な人たちに絡まれた所を助けてくれた人に、一目ぼれをしちゃいました！名前も何もわからぬけれど、どうにか探し出して、もう一度会いたい・・・・・。友達が協力してくれる。あたし、あの人に会えるかな？

(前書き)

ケータイ小説風となりますが、宜しくごめんなさい。

## 木曜日

「昨日、いい事あつたの！」

あたしことチカは教室に入るなり、親友のエリカちゃんに言った。  
「すつごいカッコいい人に会つたんだあ」

「え～。チカちゃん、ついに初恋ですかあ！ めでたい！」

「だから聞いてよお。・・・・・でも、相手の名前知らないんだ  
けど」

「え～！」

話が聞こえたのか、ナオミちゃんとマゴミちゃんも寄つてきた。

「ウチの学校？」

「違うんだ。えっと、ちょっと用事で出かけた先で、あたし、変な  
人達に絡まれちゃつて」

「え～！ 大丈夫だつたの？」

「うん。その時、その人が助けてくれたんだあ！」

「うわ～！ 漫画みたい」

「顔、カッコ良かつた？」

「どんな人？」

つぎつぎ質問していく。

あたしはなんか楽しい。こんな経験、今までなかつたもん。  
「えっと、高校生だと思うんだけど、襟に校章がついてた  
ノートになんとなくうろ覚えの絵を書く。

「あ、これ、うちの兄貴の通つてた高校だよー」

「ホント？ ナオミのお兄ちゃんつて、4月に大学生になったよネ

「うん。ねえチカちゃん。この校章の周りつて何色で囲つてた？」

あたしは一生懸命思い出す。

「確かに赤。エンジ色っていうのかな」「兄貴が同じ色だったから、なら一年生だね。あたしりと同学年だ」  
あたしはどんどん嬉しくなる。  
全然知らないあの人人が、どんどんわかつてくれるから。

「あと、何か情報ないかな」

「どうやって助けてもらつたのよ」

「うん、あたしと変な人達の間に割つて入つてくれて、ちょっと殴り合いのケンカになつた」

「こわい！」

「結構殴られた？」

「でも、一方的に強かつた！ 全然相手にならないくらい強かつたんだあ」

「へえ～！ 白馬の王子様みたいなんだ」

「そりや、恋愛経験のないチカちゃんが一目ぼれするだけあるネ」

「それだけ強いとなると、運動部に入つているのかな」

「空手や柔道やつてんのかな」

みんなが、自分の事のように考えてくれる。

なんか、みんなありがとうネ・・・。

その日一日、あたしはウキウキした気分だったあ。

金曜日

次の日学校へ、わざわざナオミちゃんが、出身中学校の卒業アルバムを持ってきてくれた。

「HIMIちゃんはチカちゃんと同じ出身校だから

「あたし達、中学校違つたでしょ？ もしかしたらいるかもって  
「ありがとう！」

「とっても嬉しいよ・・・。

でも、いるのかな？

ここにいたら、超ラッキーだけれど。

あたしはアルバムをめくる。

ナオミちゃんのアルバムにはいなかつた。

マユミちゃんが持つててくれたアルバムもめくつてみる。

そして。

「いた！ この人！」

あたしはすっごい嬉しかつた。

クラス写真の中に、この間助けてくれた人がいた。

「どれ？ どの人？」

他の三人が覗き込む。

「メガネかけてる。真面目そうだね〜」

「ケンカするタイプじゃないナ」

しばらく見ていたマユミちゃんが、言ひにくそうに言つ。

「・・・この人、中学の時は性格暗くて、あんまり印象に残つていな

「え〜。でもこれに名前とかクラブとか載つてるよネ」

黙つてみているあたしの代わりに、エミコちゃんが聞いてくれる。  
「うん。載つているけれど。・・・クラブは美術部だね。あと  
変な人つて噂があつた

「なにそれ。どう変なの？」

「よくわからなかつたけれど。いじめまではなつていなかつたけど

暗そうな人で変な人。

そんな感じ、しなかつたけれど。

前に会つた時、メガネもしていなかつた。  
新しい情報に、ちょっと落ち込むかも。

「でも、変な人つて言つけれど、平凡な人より逆に付き合つてみたら楽しいかもよ」

HIMIKOちゃんが言つてくれた。

うん、そうだよね。 HIMIKOちゃんありがとお。

「明日、この人が通り高校で練習試合があるんだ」  
ナオミちゃんが言つて。 ナオミちゃんはテニス部だ。  
「応援つて事でついて来る？ あたしはかまわないよ」

あたしは大喜びでお願いした。

学校の帰りには、マコミちゃんにお願いして、  
クラス写真のカラー印刷をとつた。

土曜日

HIMIKOちゃんが一緒についてくれた。

あたしのために、クッキーまで焼いてくれた。

あたしは意氣揚々とテニス部の人達と共に、その学校の門をくぐる。

「じゃあ、あたしは試合があるから、帰りに待ち合わせしようね」  
ナオミちゃんに「頑張つて」と言つて、残つたあたしたちは校内をつらつらとみる。

考えたら、土曜日のお昼に学校にいるとは限らないんだ。

それでも一抹の望みで、美術部と、あと行けるところまでつれつ

いてみた。

「いなかつたね」

エミコちゃんがつぶやいた。

「偶然に会えるなんて、そうそうないかあ」

疲れたあしたちは、テニス部の試合が見える、一階の大きな踊り場で眺めていた。

隣では、バレー ボール部が試合をしている。

ぼんやり眺めていたあたしの目の端に、一階へ向かう階段がみえた。

そして、そこにあの人をみつけた。

「…………エミコちゃん、いたよ」

袖を引っ張り、エミコちゃんに囁つ。

あたしの小さな声で、エミコちゃんが慌てて振り向く。

あの人気が、階段の下で立っていた。誰かを待っているんだろうか。時計の時間を気にしながら、腕を組んで立っていた。

「チカちゃん、チャンスだよ。声、かけなきや」

エミコちゃんが言つけれど、何で声をかけたら。

「ほら、この間はありがとうでも、何でも！」

エミコちゃんに背中を押されて、一步前へ出た。

その時、あの人も偶然あたしを見た。

すつごい緊張で、顔が上げられなくなる・・・・。

「お待たつ！」

その時、その人の所へ、大きな声と共に女の子が飛び込んできた。

「遅い」

「だつてさあ」

とたんに、あたしは逆に、階段を駆け上がっていた。  
一気に三階まで上がった。

エミリちゃんもついて来てくれた。

考えたら、彼女がいる場合もあつたんだ・・・・。  
・・・・遠目だつたけれど、髪の長くて可愛らしい感じの子  
だつたな。

エミリちゃんは何も言わなかつた。

ナオミちゃんと待ち合わせた場所で、一人で、エミリちゃんの作  
つてくれたクッキーを食べた。

お茶を買つていなかつたから、とつてもぱぱぱで食べにくかっ  
た。

・・・・・エミリちゃん、ゴメンね。

途中で、ナオミちゃんが帰つてきた。

ナオミちゃんは試合に負けて泣いていた。

あたしも一緒に泣いた。

それまで泣かなかつたのにね。

家に帰つて、日記帳を開いた。

そこに、昨日カラー印刷した写真をはめ込む。

告白する前にフラれた感じ・・・・。

でも、なんでだか、すぐに新しい恋を見つけられそうな気がする。

あたしは、もう一度「ペー」を取り出し、彼の顔を眺めたあと、裏を返した。

次の恋をして彼の名前を忘れる前に、鉛筆で書いておいた。

せとじぐる

そして口元にまわみなおし、机の下を出しちゃった。

(後書き)

読んでください、ありがとうございます。何かしら評価を頂けたら嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5311c/>

---

ヨッカカンノ恋

2010年10月8日15時42分発行